

木彫作家 藤戸竹喜氏

## 創業六十周年に寄せて

社長と私との出会いは、ちょうど五十年前に遡ります。折しも、先代が経営しておられたホテル事業を継承されて、創業来の名称「阿寒グランドホテル」に「遊久の里鶴雅」というユニークなネーミングを付け加えられ、リニューアルを果たされた、上昇機運といった時でした。地域に密着した事業を志す熱い念いと、将来にかけられる果てしない夢と行動力を全身に漲らせた若き経営者の姿は、あたかも大空に向かつて翼を広げ、新風をはらんで舞い昇らんとする鶴を彷彿とさせました。

初めて制作の依頼を受けたのは、たまたま二畳もある大きな鶴のレリーフでした。この鶴に籠めた社長の熱意に一杯お応えするため、一段と気持ちを引き締めて取り組んだことと、やがて完成し、いざ納品となった時、リニューアルされたばかりの八階の展示室まで運びこむのに、その大きさをゆえ、皆がえらい苦勞をしたことが思い出されます。続いて、納品させて頂いたのは、何とんでも私の原点である熊が中心となりました。大自然のふところ暮らす熊たちの表情や生態を捉え

た大型の作品群は、きつと観る方々の想像を膨らませてくれるはず。その後も社長からは、「まだまだやりますよ。これからもお願いします。」と折に触れ声をかけていただき、鄙の座オープンに際しては、その名称に相応しく思える作品：故郷の我が家に置きたいような小品を中心に選び抜き、納品したのでしたが、最適な居場所に落ち着かせていただいて、じっくりと馴れ染んでいくのも嬉しい限りです。

創業五十周年を迎えた頃から、鶴は全道に翼を広げていきました。ひとつ、またひとつと展開される宿たちは、今や衆人のみならず、財界業界の注目の的となりました。ウイングスのオープンに際しては、私のまったく新しい試みであるトーテムポールを、またその後は翼をまとったエカシの等身大立像（ふくろう祭）を納めました。天井の高い、広々としたフロアに我居場所を得たりとばかりピタリと納まっています。有難い事に、皆さんに愛していただいている様子であることが、制作者として何にも代え難い喜びであります。

私の木彫人生の集大成がここに存

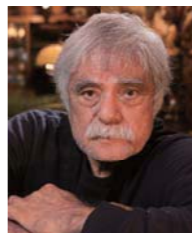
在しています。沢山の方々に観ていただき、全ての方々に阿寒を、北海道を、そして遙かアイヌモシリを実感してほしいと願っています。

実は、私こと、阿寒が国立公園に指定された年に生まれました。十五歳になった時、たまたま阿寒を訪れ、ひと目で定住を決意した事など、この地には深い縁を感じます。若しこの縁に背いていたならば、私は全く異なつた人生を歩んでいたのかもしれない。阿寒だったからこそ数々の出会いには、今では私の宝物です。人生とは、不思議なものと思わざるを得ません。

先代の夢を踏襲し、なおその上に自己の夢を積み重ねて、疾風迅雷の如く駆け抜けてこられた三十年。今なお社長の孝行心はおさまりそうにありません。にこやかなご夫妻の笑顔を拝見するにつけ、天国のご両親からのエールであることを固く信じております。果たして今後どんな夢を実現していけるのか、ますます目が離せません。ご健闘を祈ります。



あかん湖鶴雅ウイングスやあかん鶴雅別荘邸の座のロビーに、訪れたお客様が感嘆の声をあげる写実的で力強い作品の数々が並んでいます。



PROFILE  
1934年、旭川市生まれ。1997年のレニン博物館へのレニン像の出品をはじめ、1983年に英国エジンバラ公怒熊を、1984年には来町された皇太子ご夫妻へ丹頂のレリーフを献上。1994年にはワシントンDC、スミソニアン国立自然博物館にて作品展。大胆かつ繊細な作品は各方面で高い評価を受けている。

木彫作家 瀧口 政満氏

## 館内の作品を見るたびに嬉しく

私の行った高校では将来の職業を選択する科目がありました。亡き父が印刷コースを強く勧めましたが、日頃から、先輩の作業風景のぞき込んでいた私は、迷うことなく木工科を選びました。木工科では、初歩的な、刃物の扱い方から始まり、タンスの引き出しの空気の抜け具合等、何度も作り直しをさせられました。着色にしても微妙な色をどうにか調合しても最初からやり直し。とにかく仕事にきびしい先生でした。毎日同じ作業のくり返し。早く終わらせたい一心で、木クズで真っ白になりながら続けました。一方、自分が彫ってみたいと思ふものは、部屋に戻っても彫っていました。仲の良い同級生がアメリカに移住することになり、彼に小さな木彫をプレゼントしたので、三年前、アトランタの彼の家を訪ねたら、大切に飾られてあり

ました。遠い昔の若かりし頃の思い出話が夜遅くまで続きました。

北海道に来て、狭い店の中で夜遅くまで彫った私の手になるものが、鶴雅ギャラリーに展示されており、そのつひとつに思い入れがあります。広い空間に展示された作品を見るたびに嬉しくなります。作品が身近にあること、それは、新たな作品の発想につながる道標になっています。

創業六十周年  
おめでとう  
ございます。



あかん遊久の里 鶴雅のシンボルでもある、仲むつまじい二羽の丹頂は、和の心を伝えるあかん遊久の里 鶴雅のシンボルでもあります。



鶴雅グループの宿の随所に飾らえた氏の作品は、お客様に「地の物語」をお伝えする宿の象徴でもあります。

PROFILE  
1941年、満州生まれ。3歳の時、肺炎による高熱で聴力を失う。東京教育大学附属ろう学校高等部卒。同大学名誉教授 朝永振二郎博士より、口話賞授与。28歳より阿寒湖畔在住、彫刻に打ち込む。釧路、札幌、千葉、東京等で個展開催。